

東京都立小平西高校

## 進路指導・学習習慣の確立

# 「私はできる」をスローガンに、 何事にも積極的に挑戦する 学習集団を育成

### 変革のステップ

#### 背景と課題

- 大学進学希望者の増加に伴い、進路指導と学習指導を強化するため、全体方針「小西スタイル」を整理
- 学年ごとに見られた進路の取り組みの違いや、家庭学習時間の伸び悩みの解消を図った

#### 実践内容

- **3年間の進路指導計画を作成** 生徒の多様な進路希望に一層きめ細かく応じるべく、進路部主導で3年間の進路指導計画を体系化した
- **学びに向かう環境の整備** 空き教室や図書室を自習室として生徒に開放するなど、学習習慣の定着に向けた支援を拡充

#### 成果と展望

- 大学進学実績が向上
- 高校の魅力が地域に伝わり、入学希望者が増加

### PROFILE



教育目標は「創造・協調・健康」。「小西スタイル」として指導の重点を4つの領域から整理し、生徒一人ひとりが「私はできる」という思いを持って、魅力と活力のある学校を目指している。部活動や特別活動の指導にも力を注いでいる。

設立 1976(昭和51)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約280人

2017年度進路実績(現役のみ) 私立大は、亜細亜大、駒澤大、専修大、中央大、東洋大、日本大などに延べ126人が合格。短大、専門学校進学116人。就職25人。

住所 〒187-0032 東京都小平市小川町1-502-95

電話 042-345-1411

Web site <http://www.kodairanishi-h.metro.tokyo.jp>

### 全校体制での指導改善に向け、「小西スタイル」で方針を共有

東京都立小平西高校は、学習や行事、部活動などに全力で取り組む生徒が多く、活気にあふれた学校だ。多様な進路希望に応じた指導などによって進学実績を伸ばしているが、以前は生徒の生活態度に課題が見られ、地域からの声も厳しいものがあつたという。

同校が変わる原動力となったのは、2006年度に策定した指導改善の全体方針「小西スタイル」だ。「私はできる」というスローガンの下、全教師が丸となって生徒の自己効力感の向上を目指す、生徒指導を始めとするあらゆる教育活動の改善を推進していった(本誌08年度2月

号P.26～29を参照。

15年度頃からは、大学進学希望者の増加に伴い、生徒の進路意識の向上と学習習慣の確立に一層力を入れることにした。その際、「小西スタイル」のスローガン「私はできる」を実現する4つの柱として、「学習指導」「進路指導」「生



**高野 学** たかの・まなぶ  
東京都立小平西高校校長  
教職歴33年。同校に赴任して1年目。「人を思いやる心を育てる」



**喜入 克** きいれ・かつみ  
東京都立小平西高校副校長  
教職歴29年。同校に赴任して3年目。「ぶれない、くじけない、諦めない」



**伊藤 由紀** いとう・ゆき  
東京都立小平西高校  
教職歴37年。同校に赴任して8年目。進路部主任。「高校時代の学びを通して社会人基礎力を身につけさせたい」



**大石 洋子** おおいし・ようこ  
東京都立小平西高校  
教職歴10年。同校に赴任して6年目。3学年進路担当。「教師が謙虚に学び、成長し続ける姿こそが、生徒の信頼とやる気をもたらす」



**小和田あかね** こわだ・あかね  
東京都立小平西高校  
教職歴25年。同校に赴任して3年目。2学年進路担当。「やればできる!」という生徒のやる気を引き出す」



**鈴木 淳子** すずき・じゅんこ  
東京都立小平西高校  
教職歴27年。同校に赴任して2年目。1学年担任。「分かった!」「できた!」をたくさん体験させたい」

活指導」「部活動・行事」に整理した(図1)。  
喜入克副校長は次のように語る。

「指導改善の成果が形として表れてきたため、生徒の実態の変化に応じて取り組みを前に進めたいと考えました。そこで、学習指導・進路指導のさらなる充実に向け、先生方との目線合わせを図りました」

### 多様なガイダンスを検討・精選し、3年間の進路指導を体系化

進路部では、3年間を見通した新たな進路指導計画を作成した。基本方針は全校で共有していたが、学年によって異なる取り組みが少なかつたため、より体系的なものを目指そうと考えた。また、大学や短大、専門学校への進学、就職といった、生徒の進路希望に応じて行う多様なガイダンスについて、それぞれの時期やねらいを改めて検討し、精選したいという思いもあった。

ガイダンスを見直す過程で、生徒の進路決定が遅れがちであるという課題が浮かび上がった。3年生になってから進路を決める生徒が多く、一般入試での大学受験を決めても、基礎学力に課題があるケースが見られた。そこで、将来への意識づけの早期化を図ろうと、1年生2学期には卒業後を考えるガイダンスを設け、2年生2学期には進路希望ごとに、今後必要とされる学習の内容や方法などを学ぶガイダンスを新設した(P.28図2)。

また、2年生3学期には、志望大学に進学した卒業生を講師として招き、合格体験を語ってもらい取り組みを追加した。進路部主任の伊藤由紀先生はこう述べる。

「同じ学校で同じように学び、努力して目標を達成した先輩の話を直接聞けば、生徒は刺激を受け、『自分にもできる』という思いが強くなると考えました。大学進学希望者だ

図1 「小西スタイル」のスローガンと4つの柱の概念図



時期	ガイダンス名	目的	
1年生	2学期	パネルディスカッション	卒業後の進路への動機づけ
	3学期	職業別ガイダンス	職業理解、労働への動機づけ
2年生	1学期	模擬授業	卒業後の進路への動機づけ
	夏季休業	学校見学	進路意識の向上
	2学期	分野別ガイダンス	選択科目決定へのアドバイス
大学進学希望者向けガイダンス		学習への動機づけ	
3年生	1学期	志望理由書事前指導	志望校決定の動機づけ
		学校別ガイダンス	
		大学進学希望者向けガイダンス	推薦・AO入試対策
		志望理由書解説	

\*学校資料を基に編集部が一部改編

けでなく、2年生全員の参加としました」生徒の進路意識の向上に向け、アセスメントや模試の活用も強化した。例えば、ベネッセの「スタディーサポート」を全学年で行い、その結果を個別面談などでのアドバイスに生かすことにした。2学年進路担当の小和田あかね先生は次のように語る。

「定期考査などの校内の評価だけで満足しては、いわゆる井の中の蛙になりにかえりません。また、高校入試がそうだったからか、大学入試も3年生の最後に少し頑張れば何とかなると誤解している生徒もいます。全国レ

ベルでの自分の学力や成長を定期的に把握できるようにすることで、目標を高く持ち、『もつと頑張ろう』という意欲を引き出したと考えました」

以前はベネッセの「進研模試」を希望者のみ受験していたが、17年度より1・2年生7月の回は全員受験としている。さらに、3年生6月の回の受験者は、12年度には13人だったが、17年度には約130人になり、一般入試での合格を目指す生徒の増加がうかがえる。

各種検定試験への挑戦も奨励し、合格者は全校集会で表彰することにした。また、大学入試の柱となる英語の学習に早期に取り組ませるといふねらいもあり、ベネッセの「GTEC」も1・2年生は全員受験としている。

「生徒には、高いハードルを努力で乗り越える経験を積み、自信を高めてほしいと思っています。そうすれば、『私はできる』を生徒一人ひとりが実感し、何事にも前向きに取り組む集団になっていくと期待しています」(伊藤先生)

そのように、3年間の進路指導の流れや各時期の取り組みの目的などをより明確にする一方、学年独自の取り組みも重視している。

「先生方には、目の前の生徒に応じて指導を絶えず工夫してほしいと伝えています。優れた試みが新たに行われれば、他学年とも共有し、学校全体に根づかせていきたいと考えています」(伊藤先生)

## 校内の学習スペースを拡充し、学びに向かう集団づくりを強化

学習習慣の確立を目指し、取り組みの発展・改善を進めている。その1つが、校内の学習環境の整備だ。家庭学習時間が伸び悩んでいたため、「それなら学校で学ばせよう」と、空き教室や図書室などを自習室として開放することにした(写真)。当初は週2日間の設置だったが、現在では常設している。教師が生徒の質問に答えたり、学習の進め方などを個別にアドバイスしたりする姿も多く見られる。自習室は、学びに向かう生徒の集団が形成される場となっており、1学年担任の鈴木淳子先生は述べる。

「全学年が同室で学習するため、上級生が下級生に教えるといった、学年を超えた交流

写真 自習室は、平日は毎日終業時～19時まで開設している。部活動を終えてから自習室を訪れ、授業の予習・復習をして帰宅する生徒も多い。定期考査が近づくと、利用者は増えていく。生徒は分からないところがあればすぐに教師に質問し、その場で疑問を解消する。

も生まれます。また、上級生が真剣に机に向かう姿を見て、下級生は『自分も受験に向けて勉強しなければならぬ』と、気を引き締めるようです」

職員室前の廊下にもテーブルを設置し、自習スペースとした。3学年進路担当の大石洋子<sup>ようこ</sup>先生は、次のように話す。

「本校の生徒は、学習への不安からか、教師に寄り添ってほしいという思いが強いと感じます。そこで、『どの先生にも気軽に質問してほしい』と呼びかけ、夏季休業期間には、対応できる教師の一覧表を職員室前のホワイトボードに書くなど工夫しています」

毎回の定期考査では、1週間前から学習計画を立てるよう指導している。専用のカードに各教科・科目の目標点数と必要な学習時間、学習内容などを記入し、試験後には実際の点数と反省点などを追記する。担任はカードを回収し、コメントを書いて返却する。1年生1学期の中間考査では、何を書けばよいか戸惑う生徒が見られるが、次第に計画的に学習し、しっかりと振り返られるようになるという。

「担任から見通しの甘さや時間の使い方の課題などをこまめに指摘されることで、生徒はうまく計画が立てられるようになっていきます。そうした指導を3年間継続すれば、自習自習の習慣がすっかり身につくと考えています」(伊藤先生)

生徒の課題に応じた指導を目指し、習熟度別

の少人数制授業や課外学習なども積極的に取り入れている。例えば、英語では、1年生が文法を学ぶ「土曜講習」、2・3年生が長文読解を学ぶ「木曜講習」などを、それぞれ希望者に向けて行っている。講習は、外部講師と提携して行われ、土曜講習の参加者は今年、104人になっている。

### 「私はできる」の下、全校体制で指導改善を継続していきたい

進路指導と学習習慣の確立の両面から推進した改革の成果は、生徒の姿に表れている。17年度からは、同校の課題の1つである家庭学習時間の少なさへの対策として1・2年生で週末課題を導入しているが、しっかりと取り組む生徒が多く、今後どのように自主的な家庭学習へつなげていくかを検討中だ。さらに、大学進学者数は、14年度入試では88人だったが、17年度入試では126人となった。自分の可能性に気づく生徒が増加したからこそその変化と言えるだろう。

教師は、学習面だけでなく、行事などの様々な面からも生徒の成長を捉えている。例えば、生徒自身が面白いと感じる文化祭の企画が増え、校外からの来場者も目立つようになった。また、体育祭は生徒に任せて安心して見守ることができている。

「生徒は何事にもやる気があり、学習のみならず、部活動や学校行事、日常生活など、

あらゆる場面で生き生きとしています。人間とは、そのように総合的に伸びていくものなのだと思えます。生徒を多面的に見取ろうとする『小西スタイル』の考え方も合致していると考えています」(喜入副校長)

地域からの信頼も高まっており、16年度入試の受験倍率は、近年では最高となる1.61倍となった。また、以前は少なかった近隣の中学校からの受験者が増加傾向にある。同校の変化が、地域の生徒や保護者にもすっかり受け入れられていることがうかがえる。「選ばれる学校」となった同校には、新入生の気質に変化が見られる。

「本校の取り組みを理解して入学しており、最初から学習に意識が向いています。『同じくらいのレベルの高校の中では、大学進学実績がよいから』と入学の動機を語る生徒も少なくありません」(喜入副校長)

今後、生徒の変化に応じて、柔軟な指導体制を構築していきたいと、高野<sup>たかの</sup>学校長は意気込みを語る。

「本校の教育活動の目的は、『私はできる』という言葉に集約されています。これを出発点とすることで、異なる領域の指導においても、先生方と意識を共有し、足並みをそろえやすくあります。教師の異動は公立高校の宿命ですし、入学する生徒も年々変わっていきます。そうした中で、本校のさらなる発展を考えていきたいと思えます」